

登録記念物への登録

《登録記念物（遺跡関係）の新登録》 1件

1 菊池海荘宅跡【和歌山県有田郡湯浅町】

湯浅出身で、房総での鰯網漁により江戸で干鰯問屋、砂糖問屋等を経営した豪商の家に生まれた菊池海荘の宅跡である。菊池海荘は、天保年間の飢饉に際し、栖原坂改修等の救荒策を講じ、紀州藩に多くの建議を行った。また広村出身の濱口梧陵らと幕府や朝廷へ紀淡海峡の海防を献策し、実際に六斤野戦砲等を製造し広村天王浜に設置した。また地域の青年教育に尽力した人物で、漢詩文を学び、多くの儒者・文人等と交わる知識人ネットワークの中核を成した。菊池家は出身の栖原に本宅を置いており、菊池海荘の宅跡は本家の南東に位置し、約2,000㎡の屋敷地が現存している。建物は既に解体されているが、敷地の西と北を画する土塀や、菊池海荘家に伝来した屋敷図面と一致する地割と、井戸や石組水路、「神社」と記される鹿島祠等の遺構が敷地内に残る。

湯浅町栖原には豪商の住宅跡が残るが、菊池海荘宅跡はその一つであり、幕末、私財を投じ、民衆からの明治維新を担った一人である海荘の事績を物語る遺跡である。

《登録記念物（名勝地関係）の新登録》 2件

1 会津東山温泉向瀧庭園【福島県会津若松市】

会津東山温泉は、布引山に源を発して峡谷を成す湯川の溪流が会津盆地へと流れ出るところに位置し、行基(668-749)による開湯とも伝えられる温泉地で、江戸時代には湯治場として定着していた。江戸時代中頃には景勝地としても知られていた湯川の順階瀧にほど近い南岸の「きつね湯」は、廃藩置県とともに明治6年に平田家が引き継いで旅館向瀧を開業し、今日に至っている。この旅館向瀧の庭園は、江戸時代からの地割を基礎としながらも、その大要は明治時代から昭和時代初期にかけての建築に伴って整えられた近代温泉旅館の庭園として設えられたものである。庭園は、客室棟によって囲まれた南北の奥行き40m余り、比高差12m余りの斜面地に概ね下段、中段、上段の三つの地割から成る。園内にはサクラ類や落葉広葉樹が配植されて、春には花、夏にはホタル、秋には紅葉、そして冬には雪景色に添えられたたくさんのロウソクの灯りなどが、四季折々の豊かな彩りを演出している。その観賞は、庭園を取り囲む客室棟の各部屋や池泉を間近に臨む廊下、園内の中段や上段など、様々な角度からの立体的な視点や、四季折々の演出によって、風致景観の多彩な変化を楽しむことができる点に特徴を見出すことができるもので、温泉旅館に営まれた近代庭園の事例として意義深い。

2 ^{にほんばんこくはくらんかい きねんこうえん にほんていえん} 日本万国博覧会記念公園日本庭園 ^{すいたし} 【大阪府吹田市】

日本万国博覧会記念公園日本庭園は、吹田市北部の千里丘^{せんりきゅうりょう} 陵に位置する。日本万国博覧会の開催が決定され、昭和42年に国による庭園施設の出展が最終決定されると、日本庭園設計策定委員会が設置され、委員長に大阪市公園協会常務理事の田治六郎^{たじろくろう}（1904－1978）が選ばれた。翌年基本設計が完成して工事が始まり、昭和45年3月に完成、同月開園した。日本万国博覧会記念公園日本庭園は、東西約1,300m、南北約200mの細長い土地を、西から東へ上代、中世、近世、現代の4つの区画に分け、各時代の特徴を表した庭園を設ける。それぞれの庭園は溪流で結ばれ、その水の流れに博覧会のテーマである「人類の進歩と調和」を表現している。上代地区には泉と滝、中世地区には大きな洲浜^{すはま}、枯山水^{かれさんすい}、露地^{ろじ}を造る。近世地区は「心字池」^{しんじいけ}を中心とし、その向こうに芝山を築き、現代地区には「鯉池」^{こいいけ}のほか、蓮池^{はすいけ}、菖蒲田^{しょうぶた}などがある。作庭にあたっては、博覧会のテーマのほかに、伝統的な技術及び当時の最新技術の提示、画期的な広さによる多くの来園者への憩いの提供などが意図された。日本万国博覧会記念公園日本庭園は、広大な敷地に上代から現代までの日本庭園の歴史と調和を表現しており、造園文化の発展に寄与した意義深い事例である。